



いれずみ物語

3

小野友道

桃のいれずみ — 霊力、性そして龍 —

いれずみは一生涯消えないでその個人の皮膚に在り続ける。それでいれずみを入れる動機はさまざまでも、いざとなると相当の覚悟が要る。決意したとしても、今度はいれずみの図柄に迷うことになるであろう。一般的なイメージとして、豪傑、竜虎、不動明王あるいは桜吹雪などがすぐ思い浮かぶが、礪川全次は日本人のいれずみの図柄としてよく選ばれるものの一つに「桃の実」があったという。だが、なぜ桃の実かを気にしながら、未だ十分答えが出せない、その著『刺青の民俗学』を締めくくっている。その中で、古瀬(1910年)が犯罪者のいれずみの集計から、215人中29名が「桃」で、それは「女の名」、「人物」に次いで3番目であるとの報告を収載し、古川はく憶測スル所ハ『桃カラ生レタ桃太郎』ノ昔話ニヨリテ、「力」ヲ意味スト云フアリ、又嘗テ「筑波ノ桃」ナル悪僕アリ、其配下桃ノ割青シテ全国監獄内ニ跋跨セシコトアリ」と記している。また丸山(1931年)も、最も多いのが「桃」22例で、「桃太郎」も1例あったと報告している。さらに、台湾にお

ける犯罪者において、383名中、実に279名が「桃の実」であることを調査した有住の報告(1936年)を引用し、礪川は、桃太郎伝説では説明がつかないとした。そして、東アジアに共通する「桃の呪力」への信仰と関係するのではないかと述べている。いずれも相当昔の集計で、今日「桃」のいれずみが好まれているとは思えないが、それにしても、なぜ「桃」だったのか。「桃」の魔力を探らねばならない。

「桃栗3年柿8年」とあるように、桃の生長は早く、枝葉もよく茂り、短期間で驚くほど多数の実をつける。その生命力への驚異から、古代の中国人は桃の木に邪悪なものをしりぞける役割を与えたという。かの陶淵明の『桃花源記』の桃源郷の入り口のシンボルも「桃」である。花柳界の「花」も、王維の「桃紅復含宿雨 柳緑更帶春煙」(田園樂七首)を受けて、蘇東坡が詠んだ「柳緑花紅真面目」に由来し、それは桃の花である。桃の木を鬼が恐れるとする観念は晋代まで確実にあったという。桃の霊力に関

いれずみ物語

してはまだまだあるが、いずれにせよ、その生命力や魔力により桃への信仰が生まれ、それによっていれずみの図柄に採用されてきた可能性が強い。

ところで、「桃」の字は、ももの実が左右に割れることに由来する。大正時代にはやった髪形「ももわれ」も、16、7歳の女の子の、その黒髪が頭の真ん中で分けられ、それを後ろから眺めた形に由来する。2つに割れる桃の実は、さらに女陰をも意味した。江戸川柳事典に「父親の心配よそに桃が割れ」がある。「ももわれ」の黒髪に成長した娘に、また別の桃割れがある。このような性的象徴としての「桃」が、いれずみの図柄としても登場する。寺田は性的衝動からられてのいれずみも少なくないことを指摘し、「例えば左の股に桃と河豚とを、右の股に唐辛と陰茎とを文身した如き、左の股へ桃を、右の股へ口を長く尖らしたひょっとこ面を文身した如き」は、「左右相對せしめて性的象徴を現したもの」とした。ついでながら、桃色そしてピンクも妖しい。桃色は桃の花の色。一方、ピンクはなでしこ属植物の総称で、両者は、元来全く別の物の色を指している。しかし、そのイメージは、なぜかどちらも似ている。桃色遊戯あるいはピンクサロンなどに代表される性的ニュアンスである。桃色遊戯は1985年にはすでに死語になってしまったというが、その意味は、相手の同意があり、しかも互いに秘密をわかちあった固い団結のある集団によって行われる青少年の行為を意味していた。一方、ピンクもまた性表現に用いられるが、これが意外に古い言葉なのである。大正から昭和初期の隠語辞典に処女の隠語として「ピンク」「つぼみ」があり、「ピンク (pink): 処女のことをいう。英語のPink (ピンク)『淡紅色』の転訛したもの

である」(『隠し言葉の字引』)と説明され、それは女学生仲間の言葉だったらしい。性描写映画がアンダーグラウンドで、会員制の秘密グループによる映写会の時代、それは「ブルーフィルム」と呼ばれていたが、大手映画会社がピンク映画を制作し、輸入ポルノ映画が公開されるようになると、一般的にはピンク映画、ポルノ映画となったという。最近の英和辞典では、blue film の訳が「ピンク映画」になっているというから面白い。

さて、桃太郎にも触れぬ訳にはいかない。「老が世に桃太郎も出よ桃の花」と一茶が詠ったが、桃が女陰のシンボルであるとするれば、桃太郎が桃から生まれるのはきわめて自然な発想のように思える。しかし、この昔話、そう単純ではない。桃太郎がいまの形で普及したのは、江戸時代の赤本や明治以降の教科書・絵本などによるという。柳田國男は「小さき説話」の代表として桃太郎をとらえ、「人間の腹からは生まれなかったといふことと、それが急速に成長して人になった」という2点が特徴の零童譚であるとした。一般的には桃太郎は川上から流れてきた大きな桃から生まれるが、江戸期の絵巻物などでは、「流れてきた小さな桃を食べた老婆が、その場でたちどころに若返り、爺さんもまた恩恵にあずかる。かくして再生した夫婦から生まれた男の子」が桃太郎である。これを受けて、ひろさちやは、「あの桃は、霊力のつまったカプセルである」「百年に1回、しかも一個だけ実る」とし、それを婆と爺が分けあって食べると、ともに百歳から二十代の若さに戻る。「二人は喜んでセックスをする。そして生まれたのが桃太郎」と『昔話にはウラがある』で述べている。この話などからは、漢武帝が西王母から貰った桃が連想されるであろう。崑崙山に住んでいた仙女西王母に武帝が不死の薬を

所望したが、その代わりに桃の実を差し出した。それは三千年に一度だけ実がなる桃であった。武帝の側近の東方朔は、西王母の桃を三度盗んで食べたという。三千年に一度なる実を三度だから最小限六千年は生きたわけで、わが国の厄払いがく東方朔は八千年>ととなえるのは、まず妥当な数字とみるべきであろうと、桃の霊力が謳われている。

鹿児島県の坊津歴史資料センター「輝津館」には県指定文化財の「杉戸」があり、手に桃を持った西王母像が描かれている。桃山時代の作とされ、難破した中国人が助けられたお札に描き残したとされている。また、『医心方』に「昔、陳子皇という仙人が朮を食べて霍山に入り、霍山の桃をたくさん食べた。すると300年後に帰ってきたとき顔色は美しくつややかで、若者のような体力をそなえていた」とある。いずれにせよ桃には強い回春の霊力がある。

さらに桃太郎に類似した話は中国雲南省の白族にも伝えられている。うわばみ退治の英雄段赤城の話である。いろんな類話があるというが、その一つは流れてくる桃を母親が食べて生まれた異常児である。千野によると、この話が伝わる緑桃村の本主の縁起として、小さな黄龍の話の発端と結合した話があるという。「九隆神話」(『後漢書』『西南夷列傳])に沙壹という女が「牢山のふもとに住んで魚を捕って暮らしていた。ある時、水中で沈木に触れてみご

もり、十人の男の子を生む。その後、沈木が龍に化して現れたので、九人の子は驚いて逃げ去るが、末の子は逃げられなかった。龍の背に座ると、龍がこの子を舐めたので、この子を九隆と名づけた。九は、背という意味で隆は座るという意味である。長じて、兄たちは九隆を王に推した。牢山のふもとの夫婦に、十人の娘があ

ったので、九隆たちはこの娘たちと結婚し、子孫が栄えた。子孫たちは龍の入れ墨をし、服には龍の尾をつけていたという」この九隆神話が昔話化した類話に、娘が川で洗濯をしていると、九つの桃が流れてくる。それを拾って食べると、すぐ九人の赤ん坊が生まれたというのがある。これらの話、桃太郎ばかりでなく「水滸伝」の史進の身体を飾った九匹の青龍のいれずみ「九紋龍」をも連想させるではないか。「桃」と「龍」はいれずみの世界でも無縁ではない。

(熊本大学 理事・副学長)



「杉戸」部分：桃を持つ西王母像(原図カラー)
(長井一郎氏所有、南さつま市坊津歴史資料センター「輝津館」寄託)

主要文献

- 1) 板倉照平：『中国の花物語』、集英社、2002。
- 2) 稲田浩二、稲田和子：『日本昔話百選』、三省堂、2003。
- 3) 井上章一&関西性欲研究会：『性の用語集』、講談社現代新書1762、2004。
- 4) 倉田 実：桃、国文学、47；32-33、2002。
- 5) 磯川全次：『刺青の民俗学』、歴史民俗学叢書4、批評者、1997。
- 6) 齋藤正二：『植物と日本文化』、八坂書房、2002。
- 7) 千野明日香：白族の桃太郎—うわばみ退治の段赤城、国文学、44；29、1999。
- 8) 寺田精一：文身研究の興味、中央公論、35、1920。…磯川全次『刺青の民俗学』より。
- 9) 野村純一：祝儀物「桃太郎」、国文学、44；87、1999。
- 10) 半田賢龍、小林忠雄：『花の文化誌』、雄山閣出版、1999。
- 11) ひろさちや：『昔話にはウラがある』、新潮社、2000。
- 12) 前野直彬：桃、『遊びなのか学問なのか』、丸谷才一編、137-144、新潮社、1985。
- 13) 榎 佐知子：『日本昔話と古代医術』、東京書籍、1989。